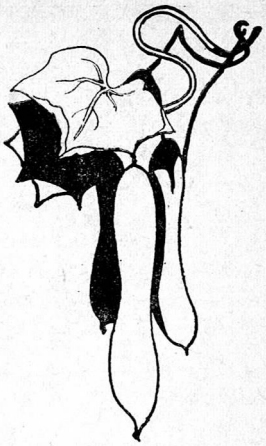

菜園の手入

中原忠夫

◇移植作業

トマト、茄子、かんらんでは本葉一―二枚が出始めた頃、瓜類では子葉（貝割れ）が開いたら早めに移植にとりかかる。移植は苗の発育に必要な光線等を十分与えるように株間を拡げ、定植の際の植傷みを少なくする為に行われるものである。従来は移植を数回行う方が良いとされていたが、短い育苗日数で圃場に出す場合、ある程度始めから株間さえ与えておけば何回も行う必要はない。むしろ移植によつて少くとも五―七日間位生育が遅延するもので、果菜のように成り花の分化と草丈の生育が平行して進行しているものではそれだけ収穫がおくれる事になる。

一　移植床

四月十日頃播種したトマト、茄子では四月下旬頃移植を行うようになる。大体この頃は札幌地方の地温は十度位で、平均気温も十度位になり、かなり暖かくなつているから強いて踏込床を利用しなくても良い。移植は勿論播種床より移植床の温度の高い事が望ましく活着も容易であるが、一般の場合なかなか踏込材料の関係等から思うようにいかぬ場合が多いので床を五―六寸堀り下げ、そこに稿稈類でも籾殻でもよいから三―四寸敷きつめて床土を入れ移植床として利用するようにおすすめする。これはいわゆる断熱層を利用した床であつて太陽熱にのみ頼ることになるが、筆者等の経験では雪のちらつく曇天でも翌朝の床土温十一度Cより下つたことはない。床土は切り返しを繰り返し乾かして入れるようにする。

二　移植の方法

移植は晴天無風の日に行う方が良く、また床土の温度も上つている事が大切である。ただ移植適期になつたからといつてこれらの点を無視して行うと活着が悪く、何日迄も凋れ根元からくびれて倒れる立枯が多発して失敗する。従つて移植の予定日の少なくとも数日前に床の準備をしておき、床の温度が低い時は無理に移植することを避け、二―三日の晴天続きを待ち障子を密閉し時々床土をかきまわし温度を高めてから移植した方が良い。

苗は普通第一回目の移植の場合根元に土をつける必要はないが、丁寧に掘取つてなるべく根を傷めないように扱うことが必要である。前にも述べたように間引を十分に行うと一株一株丁寧に苗取りが出来るので活着が早い。

移植後の灌水は極く少量に止めた方が良く、この方が後で悪天候に変つて温度の上らない場合も安全で大体土が落ちつく程度を目安とすべきである。植付後は特に陽の強い日の外はよしずを覆わない方が温度が上つて活着が早い。移植後何日もしおれるのは温度が低いためで、しおれるからといつて灌水するとかえつて温度が下り新根の発生がおくれることになり、更に床内が湿潤のため立枯が多くなるおそれがあるから注意する必要がある。

移植適期のトマト苗

三　株間の問題

移植の際の株間によつて移植回数を減らすことが出来るということは既に述べたが、家庭菜園の場合は大して早期育苗の必要がないから一回移植に止めるべきで、従つてやや広目に株間を与えることが大切である。

育苗の要点は定植の際の植傷みさえ軽くする事が出来れば素直に育てるべきで、極単に押えて仕立てた丈夫な苗よりやや徒長ぎみの苗の方が結果が良いとさえいわれている。一般で行われているように狭い床に苗立を多くして伸びすぎるからといつて灌水を控え、それでも葉と葉が重り合つているような床を見る。しかも苗床日数が長いときてはトマト等で一―二番果房がトマトトーン等の処理なしでは落花するというような現象が起るのは当然である。

大体**果菜類は強い光を好むものである**

が、育苗期間中は障子によつてある程度の光線がおさえられ、朝晩の**菰**かけによつても減るものであるから常に光線に飢えているといつても良い。従つて充分光線を利用するためには床面と障子の間隔、障子の種類を考えることも必要であるが何といつても株間の問題が大きい事になる。株間が狭いと直ぐに葉が重り合つて光線は上の葉にしか当らない。元来光線を吸収して同化作用の働きが旺んなのは上の方の新葉より下の方の古い葉で、これが日陰になつて光線をうけることが少ないということでは良い成花の出来るわけがない。

床面と障子の間隔は始めは出来るだけつめ三―四寸にしておき、生長するに従い**框**を上げてやるようにすることも良い。次に被覆の点であるが光線の通す量は種類によつて異なり、ガラスで八〇―九〇%、ビニールで七〇―八〇%、油障子では僅かに五〇%にすぎない。ビニールはガラスよりやや落ちるが取扱いが便利なのと価格が安いので大いに利用すべきである。**ビニールの使用方法**にはトンネル式育苗と障子に張る方法とがあり、いずれも一長一短はあるがトンネル式は管理がむつかしく育苗の経験が必要なので障子**框**を利用した方がやり易い。障子**框**にビニールを張る方法は色々あるが、コマイを三ツ割したものにビニールの端を一まきして障子の四方の桟に打ちつけるのがやり易い。この場合横の桟は障子の長さより両端が二―三寸位短い長さとすれば雨が流れるのに役立つ、また中桟には短いシブイチを打ちつけ、風であほられるのを防ぐようにする。使用が終るとビニールをはずして洗つておくと良いがそのままゴミを落してしまつて置いても三年は十分使用に耐えるものである。

育苗中の茄子（第二回の移植苗）

さて株間をどの位にしたら良いかという

と、トマト、茄子等で三寸角もあれば良く、瓜類では三―四寸角あると充分である。ただ移植後の発育が順調で伸び過ぎるきらいのある場合ズラシといつて床内で土を大きくつけたまま片方に寄せる方法を行つて移植に代える方法もある。

四　定植準備

いくら温床内で丈夫に育つている苗でも、これを直ちに畑に出すことは出来ない。この事は第一に先にも述べたように障子を通して光線を受けていたのでいきなり自然光線に当ると日焼を生ずるおそれがあり、第二に床内はある程度換気を図つているからといつてもかなり湿気が多く茎葉は軟弱に育つていること、第三に寒さに対する保護がなされていたのであるから外気温の変化に弱いのでこれ等の条件に馴らすことが必要である。定植は札幌地方で晩霜のおそれのなくなるのが五月二十五日頃であるから、先ず六月に入ると大体なんでも定植して良い事になる。それで定植予定日の二週間前より換気を多めにし、無風の日は少時間障子を除いて自然条件にならすようにして、段々と時間を長くし定植一週間前位からは天候に特別の変化のない限り夜間も覆を除くようにする。更に植傷みを少なくしようとするならば一週間前位にズラシを行うとか、根の廻りを鉋丁で十字に切る等の事も極めて有効である。

◇早期抽薹について

時無大根は年によつて早期抽薹株が出て問題になることがある。一般には種が悪いとか、古種だと見る向もあるが、抽薹し易い不良系統の種子ならば起りうるとしても、原因の多くは生育期間中に低温に遭うことによつて起るものである。その低温は何度かというと詳らかでないが生育の初期に特に影響が多いのではないかと考えられる。従つて融雪後畑が乾いたからといつて早々に播くのは考えものである。

人参、ほうれんそう等にも早期抽薹は見られる。これらの原因は一様ではなく、ほうれんそうの場合は春先から夏至迄の間の日中の長い季節に起り、品種系統による差が大きい。日本ほうれんそうやミンスターランド等の品種は五月―六月にかけて播くと二週間位で抽苔を始めるがノーベルやバイキングは二五日―三〇日位経たないと抽苔しない。人参の場合は複雑で簡単にいえば春播の場合、生育初期の低温はそれ程影響がなく、ある大きさに達してから、ある低温に遭遇すると抽薹が起るといわれている。道産五寸人参は問題ないが輸入五寸人参は昨年もかなり見られた。人参も以上のように品種系統によつて差がある。

以上のような原因によつて抽薹が起るとしても、同じ種を同じ時期に播いたAとBの畑でかなり差が見られるのが普通である。何故このような差が起るかというと、畑の乾燥と肥料の量によつて起り、間引の不十分な栄養条件の悪い場合に高率の抽薹を見るのである。特にほうれん草の場合は抽薹のおそい品種より抽薹の早い品種の方が生育は早いので、早春の青物不足に役立てるためには抽薹の早いミンスターランドやホーランデア等の品種を早期播種すべきである。この場合基肥に腐熟堆肥を十分施す等肥培に努めさえすればかなりの成績を収めうるものである。

ほうれんそうは土壌の反応特に酸性土壌には鋭敏で、実験によればPH六～七を最適とし、これより酸性の度合の強くなるに従い生育も悪くなつている。しかしまた石灰を反当り三〇貫も施せば例え土壌反応が強度の酸性を示しても栽培が可能であるという報告もあるので、石灰や木灰の施用は有効と考えられる。従つて基肥や追肥として硫安の施用を避け、尿素を追肥として数回に分けて与えた方が良い。

（雪印種苗・藤之沢育種場主任）